

## 【シンポジウム】 国士館の源流を探る—吉田松陰をめぐる—

2015年11月21日（土）13：00～（於：34号館B 301教室）

提題者：熊本 好宏（国士館史資料室）

勝田 政治（考古・日本史学専攻）

松野 敏之（中国語・中国文学専攻）

## シンポの趣旨説明

勝 田 政 治

人文学会では、毎年一つのテーマのもとでシンポジウムを開催し、文学部の学問領域から討議することで、それぞれの研究の活性化をはかるとともに、成果の公表につとめてきました。

今年度は、「国士館の源流を探る」というテーマを設定しました。100周年を迎えようとする、国士館大学の建学の理念（精神）には「吉田松陰の精神を範とし」と謳われています。そこで、吉田松陰にスポットをあてて論じ合うこととしました。考古・日本史学専攻が担当となった昨年、今年もNHKの大河ドラマで松陰が主人公の一人となることが決定していました。そこで、今年の今頃は松陰ブームが湧き上がっているだろう、という目論見もあってこのようなテーマを設定したのですが、残念ながらその状況となりました。しかし、100周年を機に松陰を見つめなおすことの意義には、変わりがないことから実施することにしました。

本日のシンポでは3つのテーマを用意してあります。

一つ目は、「国士館と松陰」です。そもそも国士館と松陰はどのような関連があるのか、ということです。国士館が創立されたのは1917年の大正時代であり、松陰は江戸時代の幕末に生きた人物であり、その間には約60年もの開きがあり、時代的には直接の関係はありません。本学学生の中でも松陰とのつながりを説明できる人は、少ないのではないのでしょうか。松陰との関係を、国士館史資料室の熊本さんから語ってもらいます。熊本さんは文学部OBであり、最近刊行された『国士館百年史 史料編』の編集スタッフの中心メンバーの一人です。

二つ目は、「松陰はどのようにとらえられてきたか」です。松陰は明治時代から今日までどのようにとらえられてきたか、のかということです。換言すれば、近現代史の流れのなかで、松陰像がどのように形成されてきたのか、という史学史的観点から私考古・日本史学専攻の勝田が語ります。私の専門は明治維新史、とくに大久保利通を中心とする薩摩藩であります。松陰の長州藩は今まで論文にしたことはありませんが、これをキッカケとして、松陰にアタックしていこうと考

えています。

三つ目は、「中国古典と松陰」です。松陰の思想に直接触れるものです。松陰は幕末期の思想家一般にみられるように、儒学をはじめとする中国思想のなかで自己の思想を鍛えた人物です。思想形成の一端を中国古典との関連から、中国語・中国文学専攻の松野さんから語ってもらいます。松野さんは、中国思想を専門とする新進気鋭の若手研究者です。

一人約30分の報告を3本連続で行い、その後休憩をとります。休憩中に質問用紙に記入していただき、その後質疑応答に入っていく予定です。